

「忘れると言いつつ」 —忘れてならないこと—

竹山晴夫

私は六一年前の八月六日に、当時の広島文理科大学、現在日赤病院前に建物があるボツンと残っている広大理学部一号館の中で被爆いたしました。三年前の秋に発行された証言集『あの日・あの時』の中に、被爆時の経験を略々時間順に書き記しました。今日は観点を变更后、私がこのごろ考えていること、一部は仲間とやっていることをお話し致します。

司馬遼太郎という先年亡くなられた作家が次のような言葉を残しています。

「忘れるという人間自然の
—そして偉大な—能力」

というのですね。どういう意味で言ったのでしょうか。いろいろと考えられます。忘れることが出来るから人間は平穩に生活して行けるのだと文学者らしく言ったのかも知れませんが。或いは、大正から昭和にかけてのこの国の歩み—軍・政・経を含めて—庶民のくらしについて若干の皮肉を込めて、いやむしろ、それらを憂える心から発せられた言葉のように私には思われます。

われわれ日本人は、よく言えば淡泊—物事についていつまでもこだわらず、きれいさっぱりと水に流すのをよしとする美学をもっているようです。しかし悪く言えば、忘れっぽい—歴史を風化させてしまっただけで平々な処がありますね。この点は、最近の近隣の国々との外交トラブルに痛感させられます。

脱線しそうになりました。被爆の問題にかえります。
現在被爆国日本は、公式には、「非核三原則」(核兵器を作らず、持たず、持ち込ませず)を国是としています。持ち込ませずとは勿論外国軍隊についてです。国際的には、核不拡散條約があります。しかし、現実にはどうでしょうか。新聞紙上には庶民の心配など何処吹く風という報道が絶えません。けれど、私はそういう大問題を論ずる力もありませんし、立場でもありません。

私が言いたいのは、「忘れっぽい日本人だけれども、絶対に忘れてはならないもの・ことがある」ということです。それは改めて申し上げるまでもないことですが、六一年前のヒロシマ、ナガサキです。被爆の現実・記憶は決して風化させてはならない。国も「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」を設けました。あの日から半世紀以上経ってからです。やっとなんと言いたいですか、やっとなんでも何でも一歩前進には違いありません。被爆経験の継承ということの第一は、生身の人間による語り伝えだと思えますが、此処に大きな問題があります。申し上げる迄もなく体験者の高齢化です。

—語りべは零に漸近する—

直接の被爆者或いは被爆の状況を目にした人は原理的には六—才以上です。が、赤ん坊や幼児は無理ですから、実際的にはせいぜい七〇から七五位以上の人のことになりましょう。だが言うまでもなくこの年齢層の人々は、私をも含めて、日一日と姿を消しつつあるのです。余談ですが、十数年前の私の住所に移って来て、家庭医として近くの数世代続くという医家に健康管理を頼みに訪れた時、いつポックリ逝っても不思議ではないトシだから、その心算で「……と老医師に言われたのが心に残っています。ついでに私事です。が、小学校同級の曾ての悪童共十数人とずっと交流があったのですが一人へり、二人へりして、この春とうとう私一人になってしまいました。

東友会という被爆者(広島・長崎)の組織が東京都にあります。これも年々メンバーがへって行きます。やむを得ないことも知れませんが、

なまみの語りべは急速にへって行く。それは止めようがありません。代るべきものとして、書籍・写真・映像等も大事です。上述の「平和祈念館」は被爆者個人の写真等も集めていようですが、まだスタートしたばかり、それに周知も不徹底の感があるようですね。何十年かかるか分かりませんが、こう言う資料が充実し多くの人に訴えかけるようになれば世界は変わるでもありません。

更に、直接の被爆建造物が残され遺跡として保存公開されることは、一層大事だし強力だと思えます。あの原爆ドームは勿論のことです。

このために「原爆遺跡保存運動懇談会」(事務局、東区光町広島教育研究所内)、「元広島文理科大学」(旧理学部一号館)の保存を考える会(東広島市、広島大学文書館内)等が乏しい力ですが各方面に働きかけを続けております。

「百聞は一見に如かず」と言われますが、私の貧しい経験からも、実物を直接目にし手に触れる力強さを思わざるを得ません。丁度十二年前の八月六日ポージランドのアウシュヴィッツ(ポージランド名はオフィシエンチム)のあのガス室の中に立った時の感動は今でもまざまざと胸によみがえって来ます。ボンヘッファアの処刑地跡、七月二十日事件(註)連座者の処刑場等挙げればきりがあります。

註(七月二十日事件)―ドイツ国防軍首脳部によるヒットラー暗殺未遂事件。一九四四年七月二十日、計画は失敗。関連者多数が捕えられ処刑された。

石の文化とも言われるヨーロッパには、戦争に限らず、古くからの多くの建造物が文化遺産として保存され、今なお修復の手が加えられているのにくらべ、木の文化日本では火災による消滅や腐朽によって古いものがほとんど失われて行くし、明治大正期の石造の名建築すら、保存をという世論など馬耳東風でとりこわされて行くのはご承知の通りです。東京に住むようになって、あの昭和二十年三月十日の東京大空襲の遺跡をさがしつつまだ見ることが出来ずにいます。何処かにひっそりと保存されているのかも分りませんが、と「忘れるという人間自然の力」が、どうもわれわれ日本人にはありすぎるのでは、という気がしてなりません。それにも拘らず―

六十一年前の八月六日広島

八月九日長崎

だけは絶対に忘れず、子々孫々に伝えて行かねば、と強く強く思います。

(シャローム三〇九号)